

最優秀賞（一般部門） 竹田ミヤコ

私が歩いてきた透析と転職

透析導入は、今から23年前43歳の時でした。深い絶望感と不安な状況の中で、辛く悲しい現実の始まりでした。現在の病院は娘が九州から名古屋へ嫁ぎ、孫の誕生がきっかけになり岩倉市で透析治療を受けることになりました。12年前の透析による様々な辛い症状は仕方の無いことという知識しかなく、また機械がすることだからどこもそう変わりはないだろうと、臨んだ初日に臨床工学技士、看護部長と対面しました。

「どれ位の滞在ですか。」と聞かれ「3ヶ月の予定です。」と答えると「分かりました。お任せ下さい。」との返事。この短い会話の中で透析に対する自信と誇りらしきものが伝わってきて、初めての病院ながら緊張感はすぐなくなりました。日が進むうちに、ふと体調の変化に気がきました。透析中の血圧低下もなく、気分の悪さもない、ひどくむくんでいた顔もすつきりとなったことには私も娘もびっくりしました。

何が違うのだろう、特別な薬を使うわけでもない。身体で感じる状況は今迄受けていた透析と違う透析治療に思えました。そこには同じ4時間の間に独自に組み込まれた機械を扱う高い技術を持った技士、スタッフの細かな調整がされていたことを後で知りました。透析治療に人生を賭け、こだわりを持った職人にも似た部長、洗練されたスタッフの方々との出会いは、私の大きな財産となり落胆していた私に自信が付き、生きる希望と勇気ができました。

私は幸いにもラッキーな出会いが最悪な状態からここまで元気な身体になり技術の違いを肌で感じた一人です。私のような体験を持つ人は数多くないと思います。身体は嘘をつきません。体調の良さ悪さも正直に教えてくれます。透析治療は大きさに言えば、開始のボタンを押すと同時に患者はスタッフに命を預ける治療です。透析技士として自信と誇りを持った信頼できる人との出会いを患者は待ち望んでいます。この経験を語り継ぐことは、命の恩人とも思える部長に応えるべき夢を持ち生きていく証と考えます。

